



# 香川の野鳥ファイル オオミズナギドリ

## No. 13

平成 12 年、小豆島在住の山本英樹氏が、島内でミズナギドリ類の落鳥個体を発見されました。筆者（岩田）はその記録写真を見せていただき、おそらくオオミズナギドリだろうと思いましたが、確実を期すために山本氏の了承を得て、冠島で長年オオミズナギドリの鳥類標識調査を実施されている須川恒氏に識別をお願いしました。その結果、本個体はオオミズナギドリで、当年生まれの幼鳥であることをご指摘いただいたので、その詳細を報告します。

なお、山本氏には貴重な写真を拝見させていただき、また須川氏には、突然の申出にも関わらず快く識別をお受けいただいた。ここに記して感謝するとともに、記録の公表が非常に遅れたことについて、改めてお詫びします。

---

オオミズナギドリ *Calonectris leucomelas*

---

主に外洋で生活し、島嶼部で繁殖する。大規模な繁殖地である京都府冠島は、島全体が天然記念物に指定されている。四国近海では高知県宿毛市蒲葵島<sup>びろう</sup>で数千羽が繁殖していた（※1）が、近年の状況は不明である。

四国沿岸では、徳島県では 5 月頃及び 7～10 月に観察され、時に 1,000 羽を越えるという（※2）。また愛媛県では 4～10 月頃に観察され、10 月の佐田岬では数千羽の群れが海岸に近づくこともあるという（※1）。

しかし香川県での記録は非常に少なく、文献記録としては 1978 年 11 月 13 日の迷行個体の保護記録（※3）のみで、「香川県のとりとけもの」（香川県、1993）では種は記載されているものの詳細は明記されていない。よって 2000 年 11 月 5 日の小豆島での落鳥記録は、公表記録としては 2 件目と思われる。

香川県での記録が非常に少ない原因としては、主に次の 2 点が考えられる。

①オオミズナギドリの生息に適した海域（多数の個体の餌となる魚類が生息し、フェリーなどの通行しない安全な海域）が無い。

②オオミズナギドリの季節的な移動コースから外れている。

特に②だが、例えば広島県では 1981～95 年までの 11 件の記録のうち、実に 10 件は 11 月の内陸での保護・落鳥記録である（※4）。これは広島県に移動（迷行）コースがあることをうかがわせる。

よって 2000 年の落鳥記録から、香川県でも本種が少数ながら 11 月上旬に渡来（迷行？）している可能性が考えられる。

本県では「香川県には外洋性の鳥類は来ない」という先入観から、海上はあまり観察せず、また何か飛んでいてもカモメ類と思い込む場合が多いと思われる。今後の観察、特に秋季の海上には注意が必要である。

---

※1 「愛媛の野鳥観察ハンドブック はばたき」、日本野鳥の会愛媛県支部、1992

2 「徳島県野鳥図鑑」、日本野鳥の会徳島県支部、1985

3 「香川の野鳥記」、山本正幸、1992

4 「ひろしま野鳥図鑑」、日本野鳥の会広島県支部、1998

## 1. 落鳥状況

|     |                   |
|-----|-------------------|
| 年月日 | 2000年11月5日        |
| 場 所 | 香川県小豆郡土庄町皇踏山 山頂附近 |
| 発見者 | 山本 英樹氏            |

## 2. 種の識別

種の識別は、①頭部、②嘴、③翼下面の各部の特徴を根拠とした。

|     |                                                                                                                                                             |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 頭部  | ・落鳥個体のように、頭部に縦斑を持つミズナギドリ類はだけである。                                                                                                                            |
| 嘴   | ・嘴が詳細に描かれている図鑑で確認したところ、オオミズナギドリでは鼻孔部と上嘴前端部が細く繋がっているが、他のミズナギドリ類では鼻孔部と上嘴前端部は繋がらない形状に描き分けられていた(※)。落鳥個体の嘴の形状は、オオミズナギドリと一致する。<br>・落鳥個体の嘴の色は青灰色であり、オオミズナギドリと一致する。 |
| 翼下面 | ・翼下面は、次列風切先端の黒色帯が幅広い点が目立つ。この特徴を持つミズナギドリ類はオオミズナギドリだけである。                                                                                                     |



▲頭部



▲左翼の裏面

※「The Slater Field Guide to AUSTRALIAN BIRDS」, Peter, Pat & Paoul Slater, 1986

## 3. 齢の識別

本種の齢は、次の点が識別ポイントとなる（須川氏 私信）。

|    |                                                                                  |
|----|----------------------------------------------------------------------------------|
| 成鳥 | ・頭部等の黒い羽毛にある白縁が欠けている部分が多く、ごまだらの感じとなる。<br>・鼻孔は固く、二つの鼻孔前の上嘴中央部分の盛り上がりがない。          |
| 幼鳥 | ・頭部などの黒い羽毛に白縁がきちんとついている。<br>・鼻孔がまだやわらかく、二つの鼻孔前の上嘴中央線が少し盛り上がる。<br>・綿毛がついていることがある。 |

以上を踏まえて、落鳥個体では頭部の羽毛の白縁と上嘴中央部のそそりたちが目立つ点から、須川氏より「この年巣立ちの幼鳥」とのご回答をいただいた。

なお須川氏によれば、9月の台風時などに内陸部で保護される個体は成鳥であり、幼鳥の分散時期は早くても10月末で、京都府では11月10日頃がピークとのことである。本落鳥個体は、時期的にも幼鳥の分散時期と一致する。

## 4. 落鳥の原因

オオミズナギドリは飛び立ちが下手なため、何らかの理由で地上に降りていたところを獣類に襲われたのでは、との意見もあったが、未掲載の写真では、丁寧に羽毛が抜かれてある。これはオオタカ等猛禽類の食べ方に近いと言える。ただし確実な証拠は無い。